

## 幼児の学びをアセスメントするための指標構築に関する研究

佐藤 康富（初等教育学科・教授）・原 孝成（初等教育学科・教授）

小泉 裕子（児童学科・教授）・大野 和男（児童学科・准教授）

札本 晃子（初等教育学科・准教授）・森本 壽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）

上田 陽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）

### 1. ニュージーランドにおけるテ・ファリキとラーニング・ストーリーの位置づけ

現在、日本においては子ども・子育て新法の施行に伴い、乳幼児期の教育（Education）と保育（Care）の量的・質的な拡充及び教育と保育の一元化、従事する保育者の人材確保及び質的向上など様々な課題が提示されている。ニュージーランドは、早期に乳幼児教育と保育とを統合した就学前教育統一カリキュラムであるテ・ファリキ（Te Whāriki）を策定した国として知られている。また、テ・ファリキは、2003年に OECD の世界で注目すべき5つのカリキュラムの1つに選ばれており、ニュージーランドの保育を検討することは、今後の日本における保育を考える際の一助となることが期待できる。すでに、佐藤・小泉・原・大野・札本・森本・上田（2014）で報告したように、テ・ファリキは、4つの原則（エンパワーメント Empowerment, 全人的発達 Holistic Development, 家族とコミュニティ Family and Community, 関係性 Relationships）と5つの要素（健康と幸福 Well-being, 所属と安心 Belongings, 社会参加と貢献 Contribution, コミュニケーション Communication, 探求活動と学び Exploration）から構成されている（詳しくは、Carr, 2001を参照）。テ・ファリキは、幼稚園、保育所、プレイセンター等すべての就学前教育施設に履行され、ニュージーランドの先住民族であるマオリ族とヨーロッパからの移民系の民族の価値観を内包した「二文化主義（Biculturalism）」の観点から作成されている点でもユニークなカリキュラムとなっている（飯野, 2014）。

これに対しラーニング・ストーリー（Learning Story）は、テ・ファリキに基づく保育評価（Assessment）の方法として確立されたものである。ラーニング・ストーリーは、筆者らが昨年度インタビューできた Carr 氏と本年度インタビューできた Lee 氏によって作成されたものである。Carr 氏は、テ・ファリキの作成チームのメンバーでもある。ニュージーランドでは、先に示したように様々な就学前教育施設の形態が存在するが、カリキュラムとしてはテ・ファリキが統一カリキュラムとして履行されており、その評価方法としてラーニング・ストーリーが使用されている。ニュージーランド政府は、各就学前教育施設に対する評価を行いそれに基づく補助金交付を行っているが、その評価の際にもラーニング・ストーリーによる保育評価が考慮されている。さらに、ラーニング・ストーリーでは、テ・ファリキの5つの要素に対応するように、関心を持つ、熱中する、困難をやったことがないことに立ち向かう、考えや感情を表現する、自ら責任を担うという評価の観点としての5つの学びの構え（Disposition）を示している（図1参照）。

日本においても、ラーニング・ストーリーについては様々な検討がなされている（例えば、飯野, 2009, 橋川, 2012; 2013; 2014; 2015, 松井, 2006, 佐藤, 2015）。

## 2. 保育評価及び保育記録としてのラーニング・ストーリーの利点

保育実践において、PDCA サイクルつまり計画—実践—評価—改善の重要性が語られるようになって久しく、今更保育における評価の重要性を示す必要ないだろう。では、保育における評価方法としてラーニング・ストーリーを使用する利点とは何だろうか。

Carr (2001) 自身は、ラーニング・ストーリーを使用する5つの利点として、①一人一人の子どもに即した保育ができる、②記録を他の人と議論する資料として使うことで、子どもが理解できる、③同じ保育の場にいる人々と情報が共有できる、④実践の振り返りができる、⑤一人一人の子どもとグループ両方の計画が立てられる、ことをあげている。また、橋川 (2015) は、「ラーニング・ストーリーは、子どもの心の動きとそれを理解し、判断した保育者の環境整備が作り出す対話的關係を背景にして、描き出された学びの記録である。第2に、ラーニング・ストーリーは、子どもを思考しながら行動する主体として尊重しようとする保育者の姿勢が描かれている。第3に、ラーニング・ストーリーは子どもの心の中に作られた思いとの対話を綴ったものであり、そこに綴られる保育者の言葉は、自分の言葉をメッセージとして伝達するものではなく、子どもの思いとの対話である。第4に、ラーニング・ストーリーは日常的に保育者の中に蓄積された膨大な子どもの記録が集約され描き出されたものである」とまとめている。また、「ラーニング・ストーリーを子どもがモノとかかわり、環境を切りひらくまでの過程を具体化する手立てである (橋川, 2014)」とも述べている。ラーニング・ストーリーに基づく保育記録を使用する利点としては大きく2つの側面、1) 子どもの内面の変化を捉える記録であること、そして2) ラーニング・ストーリーを通して相互の連携が図れることが挙げられると思われる。

まず1つ目の利点として、ラーニング・ストーリーは、テ・フェリキとの調和の中で、子どもの学びを物語として捉える特別な記録方法であり、子どもの学習者として成長する姿が保障されるものである (Carr, 2001) ことが挙げられる。また、ラーニング・ストーリーでは、子ども自身が①何に興味を持って取り組み、②夢中になり、③挑戦しているか、④自分の心情をどのように表しているか、⑤他者にどのように貢献しているかについて記録していく方法である (Carr, 2001)。松井 (2006) も、発達アセスメントとしてのラーニング・ストーリーの有効性を検討している。このことから、ラーニング・ストーリーは、子どもの「学び」に焦点を当てた記録であり、時間的な流れの中で子どもの姿をみて、子ども一人ひとりの発達の可能性を記録していく手法であるといえる。

次に2つ目の利点として、中坪 (2012) が保育者と子どもの家族 (保護者) が「有能な学び手である子ども」に寄り添い、子どもを理解していくという手法であると指摘しているように、ラーニング・ストーリーは、子どもを中心にそこにかかわる人々が情報を共有し合うツールとなっていることが挙げられる。飯野 (2009) もラーニング・ストーリーは、対話を共有するための記録物で、そこには子どもの写真や作品のコピーなど保存がなされ、これらに対して、教師、子ども、そして家族の評価がそれぞれの「声 (Voice)」として記録されていることをその特徴と述べている。佐藤 (2015) も、ニュージーランドにおいてラーニング・ストーリーが保護者との連携や記録の共有のために使用されていることを報告している。

### 3. 日本の保育におけるラーニング・ストーリーの課題

保育記録や保育評価としてラーニング・ストーリーの有効性は示されている（例えば、飯野, 2009, 橋川, 2012; 2013; 2014; 2015, 松井, 2006, 佐藤, 2015）が、日本の保育にニュージーランドで実践されているラーニング・ストーリーをそのまま導入することへの課題も同時に指摘されている。例えば、飯野（2009）は「拙速にニュージーランドの保育評価を真似るということを求めても、就学前教育における構造の違いもあり対応能力が具備されているとは思われず、そのままの導入は現実的ではないであろう」と指摘している。佐藤（2015）も、実際にラーニング・ストーリーを保育記録として日本の保育で実践した場合の問題点として、①ラーニング・ストーリーの記録は手間と時間がかかるため、保育業務がますます煩雑化していくなかで、その時間と労力を保育士に保障していけるのかという課題、②日本では家庭との保育記録の共有が困難視されているため、保護者との連携をいかに図るかという課題、③「テ・ファリキ」はニュージーランド特有のカリキュラムとなるため、日本では活用方法を検討しなければならないという課題の3点を指摘している。これらの課題は、ラーニング・ストーリーの活用における1) 目標と評価の関係、2) 実施の仕方、3) 記録の活用の3つのポイントまとめることができ、この課題の解決が、日本の保育におけるラーニング・ストーリー構築のためのカギとなるだろう。本稿では、まず、1) 目標と評価の関係に関する展望を以下に示す。

評価とは目標があって生きてくるものであり、目標なく評価が独り歩きすることは保育とは何かを見失ってしまうことになる。先に述べたように、ニュージーランドでは統一カリキュラムであるテ・ファリキの5つの要素に対応するように、ラーニング・ストーリーの5つの学びの構えが構成されている。日本での就学前教育のカリキュラムは『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の3つになる。幼保一元化が求められる中、カリキュラムが3つ存在している。しかしながら、この3つのカリキュラムにおける保育内容に関していえば統一されているといえるだろう<sup>(1)</sup>。ここでは、便宜的に『幼稚園教育要領』を例にあげて説明を行うが、基本的な考え方は残り2つのカリキュラムにおいても成り立つと思われる。『幼稚園教育要領』における保育内容の構造をみると2つ構造で成り立っている。1つは、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5領域であり、もう1つは「生きる力の基礎」としての「心情」、「意欲」、「態度」の育ちである。前者は、子どもとそれを取り巻く（広義の）環境を5領域という5つの側面から捉える構造であり、保育を5つの面もしくは空間として捉え、環境構成という形で保育者がそこにどのようにかかわっていくかを示す構造となっている。ここでの評価は、領域ごとの現状の記録であり、表面的に観察可能な事実の記録となりやすいと考えられる。それに対して、後者は、例えば、「友だち一緒に過ごすことの楽しさに気づく（情動的な育ち）」、「友だちと一緒に遊ぼうとする（意欲の育ち）」、「友だちと協力してごっこ遊びをする（態度の育ち）」というような、時間的な流れの中で子どもの育ちを捉える構造である。そのため、ここでの評価は子どもの変化の記録となり、保育者が直接観察はできない子どもの内面の育ちの記録となる。平成元年『幼稚園教育要領』改訂時に幼稚園教育に携わっていた保育者にインタビュー調査を行った森元・川上（2008）の報告によると、6領域から5領域に全面改訂された際に、幼稚園教育の基本を明確にし、共通理解を得られるようにするために伝達講習会を通して広められていたことが分かる。しかしながら、この

時、教師の指導性についてかなりの困難と混乱が生じたことも述べられている。つまりこの時から、保育者の姿勢として、直接的な指導ではなく、(広義の)環境を通したかかわりが重視される保育のあり方が形成されたものと考えられる。

ラーニング・ストーリーにおける5つの学びの構えは、後者の「心情」、「意欲」、「態度」の育ちに対応すると考えられる。これまで日本における保育では5領域を基盤とした評価に偏重していたといえるかもしれない。5領域の構造自体は非常に優れたものであるといえるが、そこでの評価の視点は子どもを取り巻く(広義の)環境であり、環境を通しての保育者のかかわりの記録となってしまう。逆に、子どもの内面の変化を評価することがこれまで希薄だったため、ラーニング・ストーリーによる記録に魅力を感じているといえるかもしれない。佐藤(2015)は、テ・フェリキを子どもの活動に照らして、『保育所保育指針』よりも勝る点として、①子どもの感情面をとらえている、②具体的な保育場面での子どもの対応について振り返りの質問が用意されている、③子どもの発達に則した様々な分野の能力についての記述があること、の3点をあげている。森元・川上(2008)は、「これからの保育者に求められる力として、①幼児の内面を把握する力や②幼児を中心にした、生活の連続性を考えることができる力、③やってみようという意欲と創造性」をあげている。平成元年の改訂の際に子どもの内面を把握することが相対的に重要視されていなかったといえるかもしれない。

#### 4. 日本の保育におけるラーニング・ストーリーの構築に向けて

それでは、日本の保育におけるラーニング・ストーリーの学びの構えは、どのようなものになるだろうか。Carr(2001)は、5つの学びの構えとともに、「進んでやろうとする」、「機会をとらえる」、「することができる」という学びの構えの3つの次元についても言及している。この3つの次元は、日本の保育における「心情」、「意欲」、「態度」の育ちと対応させることができると思われる。また、5つの学びの構えのうち、「関心を持つ」と「熱中する」は「心情面の育ち」に、「困難に立ち向かう」は「意欲面の育ち」に、「考えや感情を表現する」、「自ら責任を担う」は「態度面の育ち」に対応させることができるかもしれない。この場合、ニュージーランドのラーニング・ストーリーをそのまま日本の保育にそのままあてはめることも、実際には違和感なく取り入れることも可能である。「心情」、「意欲」、「態度」の育ちを具体的に評価する視点と考えれば、より日本の保育にあった観点が作り出せるかもしれない。さらに、5領域の関連としては、作成された個々のラーニング・ストーリーを5領域の側面から振り返ることもできると思われる。ある1つの活動は、必ず何らかの形で5領域の側面から捉えることができる。この時、保育者が作成されたラーニング・ストーリーを振り返る際に5領域の視点からみながらラーニング・ストーリーを重ねていくことで、例えば「子どもとモノとのかかわりの記述ばかりになっており、子どもの人とのかかわりに関する記述少なかった」などのというように、バランスよく評価できていたかについての示唆が得られるだろう。既存ラーニング・ストーリーをそのまま使用するにしろ、日本の保育におけるラーニング・ストーリーを新たに構築するにしろ、「心情」、「意欲」、「態度」の育ちとの関係を明確にしていくことが重要になってくると考えられる。

## 引用文献

- Carr, M. 2001 *Assessment in Early Childhood Settings: Learning Stories*. SAGE Publications Ltd. (マーガレット・カー (著) 大宮勇雄・鈴木佐喜子 (訳) 2013『保育の場で子どもの学びをアセスメントする—「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房.)
- 橋川喜美代 2012 テ・ファリキとラーニング・ストーリーから実践記録を読み解く 鳴門教育大学研究紀要,27,12-24.
- 橋川喜美代 2013 幼児の学びの生成と保育の質—テ・ファリキとラーニング・ストーリーの有効性— 兵庫教育大学研究紀要,43,9-18.
- 橋川喜美代 2014 保育記録から見た学びの生成と保育者の共感的見守り—テ・ファリキとラーニング・ストーリーを通して— 兵庫教育大学研究紀要,45,19-29.
- 橋川喜美代 2015 保育における評価としてのラーニング・ストーリー—ラーニング・ストーリーに見る子どもの心の動きと保育者の子ども理解— 兵庫教育大学研究紀要,46,11-20.
- 飯野祐樹 2009 「ニュージーランドにおける保育評価に関する研究—Learning Storyに着目して— 広島大学院教育学研究科紀要 第三部,58,245-251.
- 飯野祐樹 2014 ニュージーランド就学前統一カリキュラムTe Whāriki (テ・ファリキ)の作成過程に関する研究—関係者へのインタビュー調査を通して— 保育学研究,52(1),90-104.
- 松井剛太 2006 ニュージーランドの就学前教育における発達アセスメントに関する研究—Learning Storyの理論と実践を中心に— 幼年教育年報,28,79-87.
- 森元眞紀子・川上道子 2008 保育内容に関する研究 (I) —平成元年版幼稚園教育要領改訂に焦点を当てて— 中国学園紀要,7,109-119.
- 中坪文典 (編) 2012 『子ども理解のメソドロジー』ナカニシヤ出版.
- 佐藤純子 2015 就学前カリキュラム「テ・ファリキ」を用いた保育実践に関する事例研究—ラーニング・ストーリーという観察記録手法に着目して— 淑徳大学短期大学部研究紀要,54,63-80.
- 佐藤康富・小泉裕子・原孝成・大野和男・札本晃子・森本壽子・上田陽子 2015 幼児の学びをアセスメントするための指標構築に関する研究 鎌倉女子大学学術研究所報,15,67-72.

- (1) もちろん、それぞれに保育者を示す言葉の表記の違いのように文言の違いがあることは事実であるが、5領域及びそのねらいと内容に関しては、ほぼ同じとみなすことができる。また、「環境」や「遊び」の重要性や生きる力の基礎となる心情・意欲・態度の育ちなどの基本的な考え方も同じとみなせる。ただし、『保育所保育指針』においては、養護にかかわる事項がさらに加えられている。

テ・ファリキにおける 5つの要素	ラーニング・ストーリーにおける評価の観点とその手がかり 5つの学びの構え	
所属と安心 Belongings	関心をもつ	この場所にある様々な話題や活動役割などの中の興味ひかれるものを見つける。よく見知っているものに気づき、知らないものに出会うことを楽しむ。
健康と幸福 Well-being	熱中する	一定の時間、注意を持続したり、安心感を持ち、他者を信頼する。他者あるいはモノを使って遊ぶことを楽しむ。
社会参加と貢献 Contribution	困難ややったことがないことに立ち向かう	困難な課題を設定したり、選びとったりする。「行き詰った」時、様々な方略を使って具体的に問題を解決しようとする。
コミュニケーション Communication	自分の考えや感情を表現する	具体的に、多様な方法で。例) 話し言葉、身ぶり・手ぶり、音楽、造形、文字、数や図形を使う、お話をつくって披露するなど。
探求活動と学び Exploration	自ら責任を担う	他者、物語、想像上の出来事に応答する。ものごとが公正に運ぶようにする、自らを振り返る、他者を助ける、保育の進行に貢献する。

図1 テ・ファリキにおける5つの要素とラーニング・ストーリーにおける5つの学びの構え